

三重大学若手職員勉強会講演（二〇一四年十二月二十一日）

新制大学の原点

— 新渡戸稲造、南原繁、教養教育 —

田中晶善

大学になぜ「教養教育」が取り入れられたのか―
教養教育導入の立役者である南原繁は、教養教育の成否が新制大学の命運を分ける、とまで
いう。それはなぜか。
それを共に考える。

教育担当理事の田中です。先ほどご紹介いただきましたように、私が三重大学に赴任したのは一九八二年
十月、今から三十年以上も前のことで、皆さんはまだ生まれてもいませんでした。そういう皆さんに同僚の
一人として話をするには深い感慨を覚えます。

今日は、我々の職場である新制大学がどういう経緯で出発したのか、その原点を振り返り、そして特に、
最近三重大学でも議論となってきた教養教育の問題をその視点から眺めてみたいと考え、「新制大学の原点」
というタイトルにしました。

今日の話の副題の最初に「新渡戸稲造」を挙げています。おそらく皆さんにも記憶があるように、新渡戸
稲造は一昔前の五千円札の肖像に使われた人物です。

おいて新渡戸が裁定案を出し、平和裡に解決したというものです。これは日本ではほとんど知られていませ

● 知られざる親日国・フィンランド

大好評”知られざる親日国シリーズ”第6弾はフィンランド。実はフィンランドは日本から一番近いヨーロッパ、そこは意外な親日国だった。公園で行われていたのは何ぞ”桜まつり”。桜を愛でながら、和太鼓に刺術、バラバラまで日本が”沸騰”していた。その裏に日本との知られざる接点があった。新渡戸稲造、旧五千円札の肖像でなじみ深いあの人物がフィンランド人に感謝されていた。いったい100年前に何があったのか？



ムーミン、サンタクロースの国は”超”親日国

北欧フィンランドは森と湖の国。国土の約70%が森林に覆われ、湖の数は19万を超える。そんなフィンランドで取



肖像となったものの、どういう業績を残した人かあまり知られないままに、十年前に姿を消して五千円札は樋口一葉に代わってしまいました。新渡戸は多方面に活躍しており、札幌農学校、京大、東大の教授を歴任したほか、第一高等学校（現在の東大教養学部）の校長を務めています。また英文で日本人の精神を紹介した著作『武士道』で有名です（矢内原忠雄訳で岩波文庫に入っています）。また国際連盟の事務次長をして世界の平和に尽くした人でもありましたので、日本よりもむしろ外国でよく知られているようです。

先日、テレビを見ていましたら、『未来世紀 ジパンゴ』という番組で、「知られざる親日国フィンランド」という番組が放映されており、番組中で新渡戸稲造の働きが紹介されました。これは今から百年年以上前、フィンランドとスウェーデンとの間で起こった、「オーランド諸島」を巡っての領土権争いに



んが、北欧では今に記憶される有名な話のようです。現在、日本も含めて世界のあちこちで領土問題が起きていますが、当事者の間では、おそらくこの新渡戸裁定が想起されているのではないかと思います。（こういうことが「親日国」を増やすとすれば、こういう人物を持つということは、兵器や軍隊とは異なる「防衛力」と言えるでしょう。）

新渡戸稲造が今日のテーマにどうかかわるかについては後ほど話をしますが、今日の話の中心人物である「南原繁」という人物（写真）との関わりです。つまり、南原繁は戦後の教育改革で主導的な役割を果たしますが、この南原繁が新渡戸稲造の系譜に属している、ということですが、新渡戸稲造は第一高等学校の校長をつとめたことがありますが、そのとき南原繁は第一高等学校の生徒であり、新渡戸の薫陶を受けました。



南原繁は政治学者であり、戦後最初の東大総長を勤め、また歌人でもありました。（その歌集『形相』は岩波文庫に入っています。）南原の著作は、現在でも読む事ができますが、南原に関する本も近年次々出版されています。数年前、ジャーナリストである立花隆が東大で開いた南原繁に関するシンポジウムの様子をまとめた本、『南原繁の言葉』が出版されています。

その中で立花隆はこのようなことを言っています。

南原は戦争が終わった直後から、茫然自失状態の国民に対して、新聞等への執筆や、一連の公的会合での演述を通して、我々はいまどのような歴史の流れの中にあり、これから何をなすべきかを訴え続けた。

南原の演述は、さまざまな機会（国民の祝日、大学の記念日など）をとらえて、安田講堂で学生・教職員向けになされたが、そのたびに寸分で内容が大きく報じられ、国民に深い感銘を与えた。：私「立花隆」は少し年代が若いので、南原の警戒に接したことがない世代に属する。しかしそれらの演述を読むだけで、なるほどこの人あつたればこそ、戦後の日本は、敗戦でヘタつてもヘタりきることなく、精神的に復興をとげることができたのだと思った。



今日の勉強のタイトルの副題に「教養教育」を入れましたが、念頭に置いていることの一つは、今年、三重大学で新たに発足した教養教育機構が、特に新制大学の歴史の中でどういう意味を持っているのか、という事です。

新制大学というのは、要するに現在の日本の大学のシステムのことですが、日本の大学は戦争の前後でその性質も規模も大きく異なっています。現在の大学には多くの課題がありますが、そもそも大学の原点は何かということ振り返るのは、現在の大学の状況を理解する場合に一つの視点を与えます。

さて、三重大学には高校を卒業した学生が入学してきます。女子も男子もいます。大学に入ると皆、教養科目（共通教育科目）を履修します。学部の一つに教育学部があつて教員を養成していますし、また他の学部でも教員免許をとることもできます。

私たちはこういうことを当たり前に感じますが、戦前の日本の大学には、今挙げたことのどの一つも当たり前ではありませんでした。

現在では高校卒業生であればだれでも大学入学資格があります。高校に入る前は中学校や小学校で、小学

校から始まって大学まで一直線です。そしてたとえば学校の先生になろうとすれば、原則として大学を卒業します。

戦前はどうか。戦前には「師範学校」という学校がありました。これは初等教育教員の養成機関であり、現在で言えば教育学部（教員養成学部）に相当します。小学校の先生になろうとすると、戦前は、高等小学校を卒業してから師範学校へ行きました（ただし「戦前」と一口に言っても、学制はいろいろ変遷しているので、ここでは大まかな話です）。ところが、高等小学校から大学へ行く道はありません。大学へ行こうと思えば、高等小学校ではなくそもそも最初から（旧制）中学校に行き、そして特に（旧制）高等学校へ行く必要がありました。つまり、小学校を終わってからこの学校へ行くのかによって、進路がほぼ決まっていたわけですから、大学は数も大変限られていて、高等教育は多くの人に開かれてはいませんでした。

戦後はこのような学制を単純化して、学力と意思があれば、中学から高校へ行くことができ、高校から大学を志すことができる、という制度に変わりました。簡単に言えば高等教育が開放されました。その制度が現在に続いているわけです。

戦後の教育改革の要点のいくつかは、次のようにまとめられます。

まず、今述べたように、複雑な学校制度から「6・3・3・4」の単線型へ変わりました。教育の機会均等がはかられ、高等教育の大衆化（多くの高校、大学を作ること）、男女共学（高等教育を女性に開放）がはか

られました。また大学には教養教育 liberal arts が導入されました。教員養成は大学（高等教育）において開放制（教員養成を教員養成学部限定しないシステム）で行われるようになりました。高等教育で広く学芸 liberal arts を修めて教師となる、ということです。

三重大学教育学部も含めて教員養成系の教育学部のほとんどは、かつては「学芸学部」という名称でした。現在でも東京学芸大学という教員養成系大学がありますが、教員養成学部が学芸学部であったということの意味はここに求めることができます。

戦後の大混乱の中で、戦後の新しい教育のあり方を検討したのが、「教育刷新委員会」という組織です。文科省のホームページには、教育刷新委員会に関する資料が載っているところがありますが、その資料を読むと、戦後の教育の重要な基本方針がここで決められたことがわかります。そしてその教育刷新委員会の委員長をするなどして指導的な役割を果たしたのが南原繁です。南原は、高等教育だけでなく、初等教育からの学制の改革全体に対して大きな指導力を発揮しました。

戦後の教育改革は、改革というより革命に近い変更が伴いました。そのすべてを網羅することはできませんが、今日の話との関連で重要と思われることをいくつか挙げますと、まず、大学を含めた教育の目的に変

更がありました。

戦前の教育の基本は「教育勅語」に示されているように、「**国家のため**」ということであり、その枠組みの中で大学（帝国大学）の目的も規定されていて、大学というのは「**国家ノ須要ニ応スル**」ために存在しました。

戦後、教育勅語に代わるものとして教育基本法（現在から言えば旧・教育基本法）ができましたが、前文や第一条に書かれているように、その教育観の基本は、**個人の尊厳を重んじて、人格の完成を**目指すべきことでした。そういうしつかりした個人が社会を支えていくのだ、ということでした。

この教育基本法についても南原繁が委員長となった「教育刷新委員会」が大きく寄与しました。そしてそれは南原の教育観であったというだけでなく、遑れば、南原が指導を受け尊敬した新渡戸稲造の教育観にながるものであった、ということが今日の話の論点の一つです。

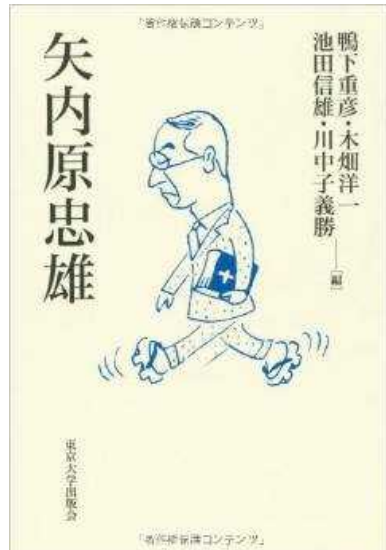
新渡戸稲造は、先ほど述べた「新渡戸裁定」のような政治的な活動も含めた様々な働きをした人ですが、本質的には教育者であったと思います。第一高等学校の校長時代、生徒に向かって人格の完成ということを常に説き、それを、生徒の一人であった南原繁や、同じく、当時、第一高等学校の生徒で、後に南原繁の後

を受けて東大の総長となった矢内原忠雄¹といった人々が証言していますが、新渡戸本人もそういう文章を残しています。

新渡戸自身の言葉として、『教育の目的』を読んでみます。
(これは有名な文章で、ネット上では「青空文庫」でも読めます。)このなかで新渡戸は教育の目的として考えられることとして5項目を挙げていますが、その後、5番目の目的として、「教育はいうに及ばず、また学問とは、人格を高尚にすることを以て最上の目的とすべきもの」であると言っています。そしてそれに続けて次のように言います。

ただ専門の学に汲々としているばかりで、世間の事は何も知らず、他の事には一切不案内で、また変屈

1 矢内原忠雄は東大における新渡戸稲造の後任教授であり、新渡戸の『武士道』の翻訳もしている。最近も矢内原に関する本が東大出版会から出ており、その表紙を飾っているのは、マンガ『サザエさん』に登場した「矢内原先生」のイラストである。新制大学における教養教育に興味について矢内原が語っていることについて、最後の資料参照。



で、いわゆる学者めいた人間を造るのではなくて、総ての点に円満なる人間を造ることを第一の目的としなければならぬ。

人格を高尚にすることと幅広い教養を身につけることは同じではありませんが、その意図としては、幅広い教養を身につけることが人格を高尚にすることに大いに貢献する、あるいは必要であるということだと思います。しかしそれだけではない。

専門の事は無論十分に研究しなければならぬが、それと同時に、一般の事物にも多少通曉しなければ人の真味を解し得ない。今日の急務は**あまり専門に傾き過ぎる傾向**をいくらか逆戻しをして、何事でも一通りは知っているようにしなければならぬ。∴これは教育の最大目的であつて、かくてこそ円満なる教育の事業が出来るのである。ここに至つて人格もまた初て備わつて来るのであらうと思ふ。

然るに今日では妙に窮窟なることになつていて、世の中に一種偏窟な人があれば、「あれはちよつと学者風だ」というが、実は人を馬鹿にした話である。また自分も一種の偏窟な人間であるのを、「おれは学者風だ」と喜んでいる人もあるが、僕の理想とするところはそうでない。∴穢い眼鏡を鼻の先きに掛け、髭ひげも剃らず、頭髮を蓬々としていれば学者だといひ、その上傲然として構えていれば、いよいよ

よいてエライ学者だというように、円満なる發達の出来なかつた者を以て学者風というのは、そもそも間違つた話だと思ふ。けだし學問の最大目的は人間を円満に發達せしむることである。：

：先ず己れの修むべきところのものは充分にこれを修め、そうして誰とでも相応に談話が出来て、円満に人々と交際をして行けることが教育、即ち學問の最大目的だと思ふ。

専門のことには詳しいが、常識をわきまえず、ふんぞり返っている人物――身近にいるかも知れませんが――を学者風だと言つて持ち上げるのは不見識も甚だしい。新渡戸はこのことを、「専門センスよりコモンセンスを教える」と言いました。

「誰とでも相応に談話が出来て、円満に人々と交際をしていける事」は、三重大大学の教育目標「四つの力」で言えば、「コミュニケーション力」¹に対応するでしょう。（わがまを言わず、誰とも話ができて円満に交際できるという「コミュニケーション力」において、大学の教員が果たして学生に教育できるような立場にあるのかどうか、率直に言つて私自身は懐疑的です。）

1 「誰とでも相応に談話が出来て、円満に人々と交際をしていける事」は、個人だけでなく、国家間においても同じことが言えるだろう。冒頭で紹介した、北欧の領土問題における「新渡戸裁定」も、その視野の中で考えることができ。新渡戸稲造が肖像となつた五千円札には、太平洋の絵柄が描かれているが、これは新渡戸稲造が若いときに「私は太平洋の架け橋になりたい」と言つたその理想を指している。国家間の「コミュニケーション力」といふべきだろう。

この文章が書かれたのは、新渡戸が一高の校長であった時期であり、このような新渡戸の精神が、生徒であった南原繁や矢内原忠雄が聞いてその魂に刻みつけていきました。

南原繁の『新渡戸稲造博士のこと』という文章で南原は新渡戸について「あれほど深い感化と影響を、われわれ当時の学生に与えた教育者は、おそらくいないであろう」と言っています。そして、

その学生たちに向って、白哲の紳士新渡戸博士が「事行」(doing)の前に「存在」(being)を、外面の世界に対して内面を、と呼びかけたことは、多くの青年の心を捉えずには措かなかつた。…

新渡戸校長がわれわれに説いた他の一つは「国際精神」(International mind)であつた。…

…「最晩年、新渡戸は日米間の戦争を防ぐ^二こうとしてアメリカに渡り、過労によりバンクーバーで死去した。」その最後の米国行こそは、青年時代からの彼の大望「太平洋の架け橋」になろうとした最後の努力と闘いであつたのである。

彼はその闘いに倒れ、生涯の志は水泡に帰したごとく見えたけれども、それから十二年、終戦後の日米国交の回復と平和の憲法は、彼の説いてやまなかつた国際精神の実現に他ならない。そのみでなく、おなじく力説した人間自由の精神と普遍的な教養は、新しいわが教育理念として採り容れられた。博士ばか

りでなく、その他多くの先人のそうした思想と努力がなかったならば、戦後の改革は受け容れられず、また行われなかったであろう。

「『新渡戸が』力説した人間自由の精神と普遍的な教養は、新しいわが教育理念として採り容れられた」というのは、後で述べる戦後の教育改革のことを指しています。戦後の教育改革の源流の一つは新渡戸稲造でした¹。

南原繁は終戦の翌年の二月、敗戦から半年後の「紀元節」の日（現在の「建国記念日」）、講演を行います。が、その中でこのようなことを言っています。

そして遂に現在の破局と崩壊に導かれたのである。事ここに至ったのは軍閥ないし一部官僚や政治家の無知と野心からのみでなく、その由つて来たるところ深く国民自身の内的欠陥にある。それは何か。おしなべてわが国民には熾烈な選民意識はあったが、おのおのが一個独立の人間としての人間意識の確立

1 戦後の教育改革に功のあった人で新渡戸の影響を受けたのは南原繁に限らない。当時の歴代文部大臣、前田多門、森戸辰男、天野貞祐。教育刷新委員会の副委員長や文部省事務次官を務めた山崎匡輔。学校教育局長や文部省事務次官を務めた日高第四郎など、枚挙にいとまがない。田中耕太郎（東大法学部長、文部大臣、最高裁長官などを歴任）もその系譜に入れてよいだろう。

と人間性の発展がなかったことである。…わが国人が概して内的教養を欠くといわれる所以も、ここに存すると思う。

人格の問題、教養の問題は、個人の問題だけでなく、国の浮沈を賭けた問題だ、というわけです。南原の教育改革についての原点はすでにこの時に示されていたと考えられます。

一九四九年、新制大学が発足した直後の東大での入学式で、南原は「大学の再建——新制大学における演術——」という講演を行っており、ここで次のように言っています。

今回のわが国大学高等教育の改革には二つの眼目がある。一つは、従来のような少数の大学に直結する少数の高等学校制度の代わりに、全国の所在に多くの新制高校と大学を設け、能力あるものは誰でも大学教育を受け得る機会均等を与えた点である。

「二つには、在来の大学の教育があまりに専門的に偏重していたのを改めて、一般的教養をとりいれた点である。特にこの第二の点は一般に大学の機能あるいは使命に関する重要な問題を含み、その成否いかに新大学制の将来の命運がかかっていると称している。

教養教育が成功するかどうかに新制大学の命運がかかっている、と南原は言います。新渡戸稲造がすでに述べていましたが、特定分野の知識しか知らない専門家の教育を行ったことが問題であった、ということです。それはなぜか。

「近代世界の大学の教育がさように専門化し特殊化する以前、「大学」(university)はその名の示すのごとく、それ自身知識の有機的統一体ある使命を担っていた。これによって人々に世界と人間についての全体の理念を与え、以て大学はよくその時代の文化の指標たり得たのであった。それが近代科学の驚異的な発達に伴い、以前は全体の一要素でしかなかった個々の科学がそれぞれに絶対の権利を主張し、ここに「科学の分裂」「大学の転落」と、ひいて近代「人間性の分裂」となって現れた…」

大学で研究されるような専門的内容の一方的な進歩が、「知」の調和を破ってしまった。そうであればまず、個人にとつても、社会にとつても、「全体を知る」ということが重要になってきます。それはまさしく南原の師である新渡戸稲造がすでに言っていたことに他なりません。その重要性は、戦争とか敗戦という事態を通じていよいよ明らかにになりました。

南原は続けてこう言います。

しからば、近代科学と人間性をその分裂から救い、大学をその本来の精神に復すにはいかにすべきであるか。それにはまず、個々の科学や技術が人間社会に適用される前に、相互に関連せしめて、その意義をもつと総合的な立場に立つて理解することである。…

これが時代の教養であつて、われわれが日常の生活において、われわれの思惟と行動を導くものは、**個々の科学的知識や研究の結果であるよりも、むしろそのような一般教養によるのである。**それは一個の紳士とし社会人として何か身につければならぬ装飾としての知識ではなく、まさに時代の高さに生きんとする人間生活の基礎的条件であるのである。

おしなべて現代人の共通の欠陥は、専門的知識や職業上の技能はあるが、根本においてかような教養を欠いている点にある。精緻な科学の理論と技術の進歩したにかかわらず、彼らは人生と世界について恐ろしく無知である。そこには、現代ヨーロッパの或る思想家¹の批評したとき「新しい野蛮人」で充ちている。

1 「或る思想家」とは、スペインの哲学者、オルテガのことである。オルテガは、「専門家」、特に科学者を新しいタイプの野蛮人と言っている。主著、『大衆の反逆』参照。

単に幅広く学んで物知りになろうというのではなく、社会の壊滅的滅亡を避けるために教養が不可欠であり、逆に言えばそういうものを「教養」と称している、ということ。 1

したがってまた、教養の教育というのは、専門教育の下請けではなく、単なる導入教育でもなく、専門教育や学問自体のあり方を考えるような、むしろ、**専門教育の指導原理、上位に位置づけられるべきもの**として出発したはず。少なくとも南原はそう考えていました。その意味では、教養教育は、初年次というよりは高学年において（少なくとも学士課程の全期間において）行われねばならず、更にはむしろ、「**専門化**」が一層進む大学院課程においてこそ、行わなければならないものであると私は考えます。 2

大学における教養、あるいは教養教育というのは、単に一般教育の単位を何単位にするのか、というだけの問題ではなく、教養教育をする大学自体の、あるいは教師自体の意識の問題とすべきです。

南原は、後に一九六〇年、ある国立大学医学部の創立記念日において、『現代における学者の使命』と題して、次のような講演をしています。

1 加藤周一は、「教養」の意味を次のように言っている。より速く動く自動車を作るのは科学技術の力だが、その目的地を決めるのは科学技術ではなく、教養である、と。

2 国立大学の第三期の中期目標・計画の策定において、大学院での教養教育が促されている。私自身はこの点自体には全く賛成であるが、しかし本来、文科省に促されるのではなく、大学自身が進んで行うべきことであろう。

戦後のわが新大学制においても教養が重要な新しい問題として取り上げられておりますが、これはひとり学生だけの問題でなく、教える人―教授―自身の問題でもあります。：学者はそれぞれの分野において専門の知識を究める者であると同時に、他方に、われわれの知性が、自然と文化の諸現象の根底に普遍的な高次のイデー〔理念、高次のイデー〕理想を目ざし、専門的知識だけでなく、それを超えた、いわば人間の「叡智」を身につけてこそ、少なくともそれを心がけてこそ、初めて学生を指導し、人間を育成する「人種の教師」たることができるではありません。

近世科学の発達にともなつて、大学が専門別的に次第に分化して各学部が生じ、その間に牆壁を高くして来たのに対して、「大学」が本来持っていた「知の統一」(unitas intellectus)を回復することが必要となつて来ました。本学の医学部が最初は専門学校、ついで単科大学、そして終戦後に総合大学の一環となつた事は大きな意義があると思います。

こゝでは二つの、しかし関連した事が言われています。ひとつは、教養というのが学生の問題というよりむしろ大学教員の問題である、ということ、これは新渡戸が強調していたことでもあります。もうひとつは「総合大学」universityの意味です。医学部が最初、医学という一つの領域だけの専門学校であつたのが、

総合大学の一環となったことは、単に組織の合併とか経営合理化という話ではなく、学問がバラバラにならず、人類の叡智を反映した「総合」に向かうべきであるという理想に一致しているからだ、ということですが。このことは、三重大学も含めて、複数の学部を持つ大学が、単に学部の寄せ集めに過ぎないということはないか、という反省に私達を導きます。大学における学部間の壁が高いということが最近も言われていますが、その背景にはこのような問題意識もあるかも知れません。¹

東京大学が戦後、教養学部という学部を作ったのは、その背景にはこのような理念がありました。この東大教養学部の初代の学部長になったのは、先に名の出た矢内原忠雄（後に東大総長）です。この矢内原忠雄もまた、一高時代に新渡戸稲造の薫陶を受けた人物でした。矢内原忠雄が新制大学の教養教育について語っている言葉を資料に載せてあります（巻末）。

戦後の教育改革の一環として、教員養成を大学において行うという大きな変革があったということを冒頭で述べました。この変革の趣旨も、今述べたことと無関係ではなく、初等教育の教師であっても（むしろ初

1 多岐にわたる大学事務職員の業務において、それぞれが何らかの「専門」的領域を持つことになろうが、ちょうど専門の学問が大きな全体の中で位置づけられねばならないように、個別の専門的業務も、大学全体の役割や全体の業務の中で理解されて初めて生きてくるということもあるだろう。

等教育であればこそ）高等教育を受けた人、大学で教養を身につけた人物がなるべきである、という理念に基づいています。その意味で南原は、教員養成を旨とする単一の組織（単科大学）を作るのは望ましくなく、総合大学の中に教員養成の機能を持つ事が望ましい、と言っています。いずれにしても、高等教育機関において広く学芸を修めた者が教員になるべきである、と。

三重大学教育学部所蔵の図書には、少なくともある時期までは、教育学部の蔵書であることを示すためにLという記号がついていました。このLというのは、リベラルアーツ、つまり学芸であり、教養教育を指しています。

以上、ごく簡単に新制大学発足時の教育の基本理念について見てみました。新制大学が発足したのはすでに六十年以上も前のことでもあり、大学進学率を始め、世の中の状況は大きく変わっていますから、当時の理念が現在にも当てはまるかどうか自明ではありません。皆さんの中にも様々な評価があると思います。

私自身はどうかと言えば、細かい点は別としても、全体としては、そして基本的には、廃墟の中から南原たちが打ち出した、新制大学発足に際しての基本的な理念は今でも妥当であるだけでなく、「昔来た道」を思わせる昨今の日本を考えあわせると、むしろ今こそ、その原点を確認しなければならない、と考えています。歴史において、原因が似ていれば結果もまた似るはずです。

その後、日本の大学は、そして三重大学は、教養教育の問題をどのように扱ってきたか。

新制の大学では、当初、教養教育の単位は、外国語や体育なども含めて合計48単位（卒業単位の4割近く）を占めていました。これにはいわゆる基礎教育科目は含まれていません。また、「文系」の学生であっても自然科学分野を12単位履修することになっていましたし、「理系」でも、人文科学、社会科学それぞれ12単位ずつ必要でしたし、外国語も二つの言語の履修が必要でした。

しかし、先入主というのか、日本の大学にしみこんだ、「専門重視」を当然とするクセはなかなか是正できず、現在に至るまで徐々に、しかし一貫して専門の単位が増え、教養教育の単位が減ってきました。教養教育の意義を原点に戻ってきちんと理解することがなければ、そもそも教養教育を担当する教師もやる気が出ませんし、学生にとっても意味がわからず面白くもないということにもなります。理科が嫌いで文系学部へ進学したのに、なぜ理系科目をまた大学で勉強しなければいけないのか…。

戦後、大学の数が著しく増えたために、旧制の高校や専門学校、師範学校を、大学に「昇格」させるといふことが行われました。東大教養学部の前身は第一高等学校ですし、第八高等学校は名古屋大学の教養部になりました。そのせいもあって、日本の大学では、教養教育担当教員を専門教育（学部教育）の先生に比べ

て低く見たり、実際に低く扱ったりという、まさに教養の欠落した悪しき伝統ができてしまいました。この点において、教養課程を担当するのは「大教授」であり、教養教育の担当は名誉であるとされているアメリカの大学とは大きく異なっています。そもそも、「超一流」とされるハーバード大学やエール大学の学士課程は教養教育課程です。「学部」として分かれていません。エール大学の入学願書を見たことがありますが、学部別の願書というものはなく、「専門」については、まるでちよつとしたアンケートか何かのように、どんな分野に関心があるか *possible major* を願書の端つこの空欄を使って訊ねていただけでした。

三重大学の場合はどうでしょうか。

組織の問題としては、いわゆる旧帝国大学をはじめとして、歴史のある大学では多くの場合、旧制の高等学校を母体として教養部ができました。その弊害はありましたが、他方、教養教育に責任を持つ部署があるという利点がありました。しかし三重大学は歴史上そのような組織をもっていなかったために、教養教育を専門に担当する部局を持つたことはありません。その意味では、規模は小さくありますが、三重大学において教養教育を専門に担当する初めての独立部局である「教養教育機構」ができた意義は小さくありません。

他方、教養教育自体についてはどうか。新制大学が発足した当時、教養教育の必修単位数が、基礎教育を除いても48単位あった、と先ほど言いましたが、来年度からの三重大学の新しい教養教育でこれに相当する

講義の単位は26単位です。半世紀を経てほぼ半減。これは今回少なくなつたのではなく現状維持ですし、また三重大学に限つた傾向ではありませんが、しかしながら「教養教育」を充実させようとするよりは、もっと減らしたいという意向は三重大学にも少なからずあります。そうであるとすれば、それは歴史に学んでいないことの反映であるとともに、そのような空気の中で教育された学生がやがて教える立場に立つた場合、教養教育の重要性を若い人々に伝えることはできないだろうと思われまふ。むしろ、現在、教養教育の重要性が教員の中で認識されていないとすれば、それはその教員自身が、その世代が、そのように教育されてこなかつた結果と思われまふ。敗戦という大きな犠牲を払つた反省の上に立つた戦後の教育改革が、「のど元過ぎれば熱さ忘れる」というようになっていないか。

教養教育はその内実が重要であり、その趣旨からは専門教育においても教養教育をすることは原理的には可能ですから1、26単位という数字自体が必ずしも問題であるわけではありません。また逆に、**教養教育の**1—1991年の「大綱化」では、このような考え方（「専門教育との有機的な関連性」）に基づいて一般教育と専門教育の**区分を廃止**したとされるが、現実には、「教育体制の改善」として、一般教育を担当する**組織の廃止**が強力に進められた。その結果は当時から自明であつた。三重大学においても残念ながら本質的な議論は行われず、「文部省への対応」に終始した。「教養教育」の当事者（意識）がどこにもなかつたからである。その意味で、今回、教養教育に関する議論が大学外部からではなく（学長からではあるが）内部から起こつたことは、少なくともそのこと自体は画期的である。

意味を認識せずに行われる教養の講義は、単なる専門教育よりも弊害が大きいかも知れません。いずれにしても、教育の目的というものがまずは大学関係者の中で十分に認識されていなければならない。

来年度から新しい教養教育が始まりますが、単に単位だけの問題だけではなく、新制大学の出発点を振り返り、その原点に立ち返りつつ、二十一世紀の課題をその新しい教養教育が担っていかなければならないと私は考えています。それは教養教育機構だけの問題ではなく、三重大をあげて取り組んでいくべき事柄であると思います。

最近、「ウェーブ三重大」 Wave Mie University という冊子の47号が発行されました。この号のテーマは「百門の大都」ですが、これは知の全体、という意味を込めたものです。そして巻頭言として、私は次のようなことを書きました。

学問は、まずは一つの門から入って深く細かく知りたいという動機から始まりますが、やがてその全体像と意味を知りたくなるという、もう一つの指向性を宿します。「教養」が主として後者にかかわるものとすれば、大学において教養が繰り返し問題とされるのは、専門化・細分化の行き過ぎを正そうとする学問自体の、そして大学という組織の持つ内在的な力によるものです。

これは学問を進めれば自動的にそうなるというのではなく、そうあるべきである・あつてほしい、という私の祈りです。

* * *

私はこれまで三重大で教え切れないほどの講義をしてきました。そのほとんどが化学に関するものです。が、大学教育そのものについてまとまった話をしたのは今日が初めてで、そして最後であるかも知れません。貴重な機会を与えてくださった皆さんに改めて感謝と敬意を表して、私の話を終わります。

質疑応答

Q 就職においては、専門的知識や技術を持っていることが重視されるとよく言われますが、教養教育より専門教育が重要ではないのですか。

A 必ずしもそうとは言えません。「専門」は会社で教えるから、大学では幅広い教養を身につけてほしい、という声は産業界でも少なくありません。今回、新しい教養教育を計画するにあたって、私は会社の役員など何人かの産業界の人たちに意見を求めましたが、その方達も同様の意見でした。私は（正直のところ）意外に思うと共に、大変心強く感じました。

電子工学のこの分野の専門的知識・技術を身につけた人材がほしい、などという場合はもちろんありますから、すべての場合に「まず教養」というわけではありませんが、会社等が求めているのは、すぐ役立つ人材というよりは、会社に入ってから成長していく人材です。その成長の土台としての「教養」です。（その意味では、教養教育というのは、自己研鑽も含めて、大学時代で終わるものではなく一生の課題です。）

本稿は、二〇一四年十一月二十一日（18～19時）、三重大学メディアホールで行われた、若手職員勉強会における講演内容である。文章にまとめるにあたり若干の整理を行った。

私の体調にはまだ不安が強く残っていたが、当日の参加者四十名が、勤務後の一時間、静かに耳を傾けてくれた。司会は、私がかつて生物資源学部で担任をした小木曾豊史君。

この講演内容は、学内では唐突の感を与えかねない浮いたものであるうことを自覚しつつ、自らの記録として残すこととした。

本文中および資料の引用は下記による。（引用におけるゴチックは引用者による。）

立花隆『南原繁の言葉』 東京大学出版会

新渡戸稲造『随想録』（岩波文庫『新渡戸稲造論集』）

南原繁『南原繁著作集』（第七卷および九卷）岩波書店

矢内原忠雄『矢内原忠雄全集』（第二十一卷）岩波書店

〔卷末資料〕 大学の教養教育への矢内原忠雄の言及。

新制大学の教養学部もしくは教養部と旧制高校とはどこが違うか。第一に、一般教育を主眼とする点においては両者共通であるが、教養学部の方が旧制高等学校よりも一般教育の幅が広く、趣旨が徹底している。すなわち文化、理科を問わず、人文、社会、自然の三系列にわたって、おのおの三学科十二単位を履修することが要求せられている。：

第二の差異は、この一般教育をさずける機関が、旧学制では大学の外にあつたのが、新学制では大学そのものの中に取り入れられた点にある。：それゆえ旧制大学からの「大家」の列にある老練な大学教授が進んで新制大学の一般教育を担当し、その円熟した、よくこなれた学問をば、平明な言葉で講義することが望ましい。：

新制大学の前期課程（すなわち教養学部）が旧制高校と異なるごとく、その後期課程（すなわち専門学部）は旧制大学と異なるのである。教養学部もしくは教養部だけが新制大学であつて、専門学部は旧制のまま続くのではない。：

旧制大学は三カ年で専門の技術的な職業教育を完成し、職場ですぐ役立つ技術者を社会に供給することを目標とした。もしもこの目標がそのまま新制大学の目標であるならば、新制大学の教養課程、すなわち専門の各学部負担は過重とならざるを得まい。それは、従来三カ年でなした専門教育を二カ年ないし二カ年半でなすだけでなく、六三制の下部から順次送りこまれてくる学生の学力が、技術的には旧学制におけるよりは低い可能性があるからである。従って新制大学の後期課程（すなわち専門各学部）が、その卒業生の職業的技術者としての学力を従来の水準に維持しようと思えば、それだけ前期課程に対する要求を重くし、その結果新制大学の教養学部もしくは教養部は、申請高等学校から技術的には教育程度の低い学生を受け取り、後期課程たる各学部からは旧制高等学校卒業程度の学力ある学制を要求され、その板ばさみとなって、新制大学における一般教育という、その本来の使命をゆがめられるおそれがある。

従って一方では、新制高等学校の教育の内容と方法を大学の立場から再検討する必要があるとともに、新制大学の後期課程（すなわち専門各学部）のあり方と目的についても、旧制大学時代とは異なった理解と工夫を必要とする点があると思われる。それは要するに後期課程の一般教養化の問題である。もちろん新制大学の後期課程は専門的な職業教育をさざげるところであるが、それを旧制大学におけるように、技術的に一応完成した専門家をつくるものとしてでなく、むしろ一般教養のしみこんだ専門教育とすることが新制大学の趣旨であると考えられる。

新制大学の教育が理想的に行われるとすれば、たとえ後期課程を卒えた時において習得する技術教育の学力は低くなると仮定しても、これから伸びてゆく可能性という意味における学力は必ずしも低下せず、かえって増す

であろう。旧制大学の教育は、あまりに狭く専門化した技術教育をつめこんだために、今日の進歩した学問および技術を育ててゆくための基盤が脆弱であり、社会に出て一応すぐに間に合うかわりに、将来伸びてゆく可能性が少ない。これに反し、市民としての一般教養を広くもつとともに、専門家としての一般教育を受け、大学卒業後において専門家として十分伸びてゆく素養をもつ卒業生を出すことが新制大学の趣旨であろう。

『矢内原忠雄全集』二十一卷 p. 324
327

新制大学においては一般教養科目が置かれ、普通どの大学でも最初の一年乃至二年間に一般教養科目をまとめて授業する仕組になっている。併し之は設備その他の点から来た便宜の方法であつて、新制大学の理想から言えば四箇年の大学課程の全部にわたつて、専門科目と一般教養科目を併行して課することが望ましいのである。例えば工学部の学生は哲学とか経済学とかいう一般教養科目をば、専門の工学と併行に、或いは**工学の主要科目**を履修したる後において**学ぶことが有益であるとも考えられる。**

教養が学問に役立つ第一の事は、学問的視野を広くし、学問の根底を培養する点にある。∴従来のような専門に分れ、分析に過ぎた学問の方法を或る程度改めて、広い学問的視野をもち、一般教養によつて培養せられた総合的頭脳によるのでなければ、深い学問的研究は出来なくなつてきたのであつて、日本の学問の發達の為に一般教養の普及は重要な前提を為しているのである。

教養が学問に役立つ第二の事は、人間性を陶冶して、いわば「人間」を作ることである。教養のなき人間は野卑である。野卑というのは、人間としての氣品を具備しないことである。この人間としての氣品が真理探究の思

慕と善の目的観念を養うものであって、それなくしては深い学問は到底発達し得ないのである。：

人間の本来あるべき姿とは、人間が人間として有つ気品、換言すれば人間が人格として有つ人間性の發揮である。この人間性を培い養うものが「教養」である。：

『矢内原忠雄全集』二十一卷 p. 414
418